

新シリーズ：シリアの牧畜社会の変容と資源管理

第1回：牧畜民の定住化

シリア北東部の牧畜民の本格的な定住化は1950年後半以降おこなわれた。それ以前においてジャジーラとも呼ばれるこの一帯は、ハブール川やトルコ国境近くの耕作地帯をのぞいて定住集落はごく限られた一部の土地で成立していたにすぎず、牧畜民が広範囲に遊動する放牧地であった。19世紀から20世紀初頭にかけて当該地域を訪れた欧州の旅行者たちは肥沃な大地が牧畜民に占有される様に一様な驚きを呈している。ところで、50年ほど前からの一連の定住化への流れは、国家政策による外部強制的なものというより、ジャジーラ平原で急速に進んだ農業開発と同時並行して牧畜民が自律的に近代農業をかれらの生業に取り込む過程で生じたものと考えられている。しかし、定住家屋を築いて耕作を開始したところで、それは天水依存の原初的な農業形態であり、作付けも大麦主体で本業である牧畜の補助生産の域をでない。したがって、農耕地が拡大し相対的に草原面積が減少した環境下で、彼らが農業に手をつけたとは言え、農耕地と草原の往復などの積極的な季節遊動を継承し、仕切りなおしをして、新たな牧畜経営に適応していったという見方も成り立つであろう。

そもそも牧畜民とは、何だろうか？「動物の群れを管理し、その増殖を手伝い、その乳や肉を直接・間接に利用する生業の民」というのが一般的ないし原則的な類型としての定義となるが、現実の世界には多種多様な形態の牧畜が存在している。また近年の近代化の波及により、おなじ牧畜民であっても歴史過程で農耕や他の生業と複合化し、それらの組み合わせの比率からさらなるバリエーションが生みだされてきている。それは、生業様式として生活のすみずみにまで影響を及ぼす点で、先進国における産業としての「畜産」とも一線を画している。とまれシリアにおいて、都市居住者がしばしば牧畜民を指し示す「ベドゥ」という呼称には、砂漠の劣悪な生活への憐れみとも軽蔑とも解釈される語感とはうらはらに、自分たちでは生きていけない過酷な場所で生活を成立させる人々への畏怖が複雑に入り混じったまなざしとして受けとめられる。

これまでAAINewsでは、シリアに関する話題として、〈シリアの自然と農業〉、〈農業普及〉、〈園芸療法〉など何度か取りあげられてきている。新シリーズでは、シリア北東部、ハサケ県のジャジーラ平原のほぼ中央に位置するアブド・アルアジズ山地に居住するアラブ系牧畜民バグーラ族にスポットをあてる。そして、牧畜および天水農業など基軸となる生業活動およびその変遷を紹介しつつ、放牧地利用のありかたや現在彼らが直面している問題点について整理してみたい。とくに、アブド・アルアジズ山地の環境史に立脚しながら、草原生態系における資源管理という観点から乾燥地の環境利用に対して多角的な検討を加えていくつもりである。



バグーラ族とベート・シャル(黒ヤギの毛で編んだ天幕)



アブド・アルアジズ山地の遠望